

● 公開対談シリーズ第10回 ●

NINAGAWA 千の目

9月15日、女性客で満員の会場に登場した小栗 旬さんに注がれたファンの熱い視線。

しかしそれに負けない蜷川幸雄の小栗さんへの熱く“大きな期待”が、そして“見守る温かさ”が溢れたトークのひとつとき。

俳優・小栗 旬の未来に思いを馳せた。

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

俳優

蜷川幸雄×小栗 旬

最初から『ハムレット』をやらせようと思っていた

蜷川 (以降N) 初めて小栗と挨拶をしたのは、シアターコクーン
の楽屋で5〜6年前だったと思うけど。小栗 (以降O) はい。多分『唐版滝の白糸』だと思いますが。
N 藤原竜也の楽屋の手前の廊下のところに立っていました。
ちょっと格好いいなというのと、利口そうだなと思いました。ま
あ時々間違えるのですが。(笑い) それで小栗と仕事をしてみよ
うかなと思ったんです。初めて一緒に仕事をした『ハムレット』は
何年前?

O 二十歳のときなので、今から約5年前です。

N 『タイタス・アンドロニカス』は?

O 『タイタス・アンドロニカス』は去年です。

N 去年か。『ハムレット』から『タイタス・アンドロニカス』
に行くとなんて全然違うね。僕はこの間彼のフォーティンブラスを見直して、あの時はいいと思ったけど、小栗はまだやる
ことはたくさんあるなと思いました。それで『タイタス・アンドロ
ニカス』を見るとまだまだこれだけ成長するのかと、思いまし
てね。明らかに違うよね。

O そうですね。

N 実は、最初の『ハムレット』では「小栗、ハムレットがで
きるように台詞を覚えておけよな」と言ったんです。藤原君の
ハムレットもいいけれど、ある日突然小栗のハムレットに切り
替えようかと思って。それで小栗のハムレットがよかったら、藤
原君と交互にやりながらどっちがいいか競わせたいなと思いま
した。ところが、そのときもう小栗はしり込みしていた。チキンレ
ースで負けたのです。(笑い)O もう本当に恐れ多いと思っていましたよ。目の前で藤原君
の芝居を見ていて、ちょっと今は「ハムレットをやりたい」なん
て言うてはいけないと本当に思いました。

小栗、おまえはそんなところで生きるな

N 小栗には、最初俺はトップではなくていい、2番手か3
番手、もうちょっと楽なところになりたいところがあった。
僕はそれにいら立っていたんです。「このほかか。そんな楽
なところで生きるんじゃないよ」と思っていました。小栗は格
好がよくて、芝居もうまくて、役をつくるというのにはある角度
があるが、その角度のセンスがちょっといい。「いずれはちゃんと主役をやらなきゃな、ちゃんと次の演劇
界を担ってくれなきゃ」と僕は思って、これをやれよ、あれを
やれよと渡した。『タイタス・アンドロニカス』は、イギリスの
ストラットフォード・アポン・エイボンというシェイクスピアが生
まれてそして亡くなった場所にある、ロイヤル・シェイクスピア・
シアターという劇場でもやりました。その舞台に立つのは、
以前に真田広之さんが出たことがあります、それ以外の日本
人のカンパニーがそこでやったのは初めてで、とても記念すべ
きことなんです。その時小栗はものすごく評判がよく、芝居の
上がりも、演技もとてもよかった。それで多分自信を持ったと
思うけれども、その時の心境をちょっと教えてくれないかな。

O そうですね…

N 吹けよ。(笑い)

O あのイギリスの評価は本当に素直にうれしかったです。

N 例えば小栗がカーテンコールへ行くと「ワアーツ」となるわ
けです。劇評でももちろん褒められているから、町を歩いても
そうだね。ほら、もっと言えば。O 『タイタス』のエアロンもさいたまの初めのほうの時は、ま
だちょっと自信がなかったんですが、その後に新潟で僕は蜷川
さんに1000本ノックを1回受けたじゃないですか。あの後から
ですね。やっぱりちょっと自信を持つようになったのもそうだし、
自分の中でちょっと気持ち悪かった部分が取り除かれて「あ、
行けるな」という感じがあった。そのままイギリスに乗り込んだ
ので、そういうふう言ってもらえたのは、やっぱり本当に「やっ
てやったぜ!」という感じでしたね。N 芝居はいいものであっても、長い間やっている間に少しず
ついろいろと変質してってしまうものなんです。その1000本
ノックについて言うと、けっこう労力とエネルギーがいるもので、
面倒くさかったと思うが、よく耐えていた。O その日は「ばかやろう、この淫売が!」というせりふを50
〜60回言わされて。「ばかやろう、この淫売が!」、「はい、だめ。
もう、1回」という…

N ですって。(笑い)

「小栗、次のステップに行くんだぜ」

N この前『お気に召すまま』で一緒に仕事をしていた時には、
三つか四つ他の仕事も抱えて忙しくて大変だったでしょう。

O 正直、本当に大変でした。ゲネプロの日まで雑念がなく板

ほかのジャンルでは用意できない高いハードルを小栗のためには用意したい。(蜷川幸雄)
の上に出られた日がなかった。『お気に召すまま』をやっている
のにどこかで違うことを考えているとか、芝居している最中に台
詞は出ているけれども自分の感情は全然それに追いついていっ
てないとか、そんなことは僕自身初めてでした。稽古をやってい
る時は絶対にそれだけに集中していたし、そこしか見えていない。
それに対して応えたいと思ってやっていたけれども、体もついて
来なければ心はもっとついて来てなくて。だから稽古をやって
いる最中も、目の前で3年前からの成宮君の成長みたいなもの
を突きつけられて「ああ、ナリすごいな」というところからどん
どん卑屈になっていくというか、「何やっているんだろう、俺」と
いうことでネガティブな思いまで膨らんできて、つらかったです
ね。N 多分大変だろうなとは思いついていて、小栗が
それを人に悟らせないようにこなしただけいいな僕は思ってい
るわけ。時代に欺いて、とっぽく生きてほしいな僕は思って。次は、僕たちは『カリギュラ』という芝居をこの劇場ではなく
シアターコクーンでやります。難しくて詩的で格好いいが、狂っ
た王様の話で、これは「小栗、ちょっと次のステップへ行くん
だぜ」という感じが僕はあります。僕自身も余りやっていない室内
劇で、ここのところ脚本を読んでいて、「まいったな、大丈夫かな」
と正直思っているんだよ。O 『お気に召すまま』で1回よくわからない自分と出会う
て、今カリギュラという役を自分のものにしてちゃんと立てるのかと
いうのは、本当にちょっと恐怖ではありますね。でもそうした蜷
川さんがいるとなると、逆に最初の稽古のスタートでは、これだ
たらいけるかもしれない、という状態に自分を作っておかないと
いけないと思いましたよ。N うれしいね。この芝居では、沼の底に沈んだように世界を
見てやりたい、こんなうす汚い世の中は拒絶したいと思ってい
ることを、逆説的に狂ったほうが何を求めていたのか、美しいも
のとは何と考えていたかということができたらいいな、と思ってい
るんだ。O 正直に言ってこの脚本を読んだ時、すぐに理解できる話で
はありませんでした。今現在もカリギュラが考えていたことに対
して、どういうアプローチをしていくか、どういうふうに持ってい
くかは模索中です。でもこの『カリギュラ』という芝居で、一度
自分の24年間の、もうすぐ25年ですけど、その自分自身の集
大成としてやりたいなという思いが生まれています。

N 期待しているよ。(笑い)

profile: 小栗 旬 (おぐり しゅん)
1982年生まれ。TV、映画、舞台と幅広く活躍。TBSドラマ「花
より男子」花沢類役でその人気を不動のものにする。映画では
公開中の「キサラギ」(監督:佐藤祐市)、「クロースZERO」(監
督:三池崇史)と主演がつづく。蜷川演出の舞台では「HAMLET」
(2003年)、「お気に召すまま」(04年、07年再演)、「間違いの喜
劇」(06年)、「タイタス・アンドロニカス」(06年)に出演、現在は
「カリギュラ」に出演中。